

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

IFRS導入の制度的課題

照屋 行雄

企業の財務状況に関する情報は、投資者や債権者など企業を取り巻く各種の利害関係者にとって、極めて有用な判断形成の基礎となる。企業の財務情報は、企業会計によって作成される財務諸表によって開示されるが、多くの利害関係者は財務諸表に記載された情報を分析して合理的な意思決定を行っている。

財務諸表の内容は、企業の財務状況を適正に表示したものでなければならず、一般に公正妥当と認められる財務諸表の作成ルールとして会計基準が開発されている。会計基準は、企業が投資者や債権者などに開示する財務諸表情報の品質を保証する社会的制度であり、長い間の会計実務の中から慣行として発達したものを体系化したルールである。

企業の開示する財務諸表の国際間での比較可能性を高め、国内外の投資者等の適正な判断と合理的な意思決定を支援するために、国際会計基準が開発されている。この基準は一般に国際会計基準として知られているが、正式な名称は国際財務報告基準

(International Financial Reporting Standards : IFRS) となっている。

IFRS は、2005 年からの EU の全面導入を皮切りに、既に 100 カ国以上の多くの国々の会計制度に導入され、適用されている。わが国でもアメリカの動向を注意深く見守りながら、早ければ2015年か2016年から上場企業の連結財務諸表の作成に、IFRS を強制適用するロードマップを公表した。

しかしながら、2008 年秋のリーマンショックとその後の金融危機の影響で、アメリカの動向を受ける形でわが国金融庁においても、IFRS の日本企業への導入の方針や適用年度について見直しを開始した。これによって当初予定していた 1015 年度 3 月期からの IFRS 導入は、事実上 3~4 年延期されることとなった。

IFRS のわが国企業への適用についての検討ポイントは、①適用企業の範囲を上場企業に限定するの

か、②適用は強制適用とするのか任意選択性にするのか、③企業集団の連結財務諸表のみに適用するのか、④例外的事象が生じた場合の適用除外措置を設定するのか、⑤導入決定から実際の適用開始時期までのインターバルを何年とするか、などである。

IFRS の導入をめぐる最近の状況は以上のとおりであるが、市場関係者の間では、投資者等が企業の財務事情に精通した上で合理的な経済的意思決定が行えるために、また、多くの国々が採用している IFRS をわが国会計制度に導入することによって、国内証券市場への投資資金の流入を誘発し、日本企業の資金調達環境を強化することが期待されている。

他方で、IFRS を全面的にわが国会計制度に導入することについての強い反対も少なくない。理論的には、IFRS の会計基準としての品質への疑問が提起されている。第一には、IFRS の会計観は伝統的なわが国の収益費用中心の考え方ではなく、資産負債重視の考え方を採用している点、第二には、資産負債の評価基準が公正価値（将来キャッシュ・フローの現在価値）の考え方を採用している点、などが挙げられる。

制度的には、IFRS のわが国への導入のあり方についての問題提起が認められる。第一には、IFRS 導入に当たってわが国にも会計基準開発での制度設計戦略が求められること、第二には、わが国固有の商慣習や税制度に適合した会計基準の導入や改訂が求められること、第三には、非上場企業への IFRS の適用のあり方や中小企業の会計処理に及ぼす影響を十分に検討すること、などが指摘できる。

会計基準の国際標準としての IFRS 導入の必要性和方向性は、基本的には変わらないとの認識が一般的であるが、IFRS 導入に当たってのこのような制度的な課題については、各国での導入の実際とその効果を正しく把握して対処する必要があるとともに、財務諸表情報の作成者側と情報利用者側に改めて周知徹底することが強く求められている。

(所員/てるや・ゆきお)

日韓国際経営研究交流会開催さる

卒業式の興奮も覚めやらない3月30日午後、湘南ひらつかキャンパスでは、韓国中央大学校から招聘した3人の研究者を交え、国際物流の動きをめぐる新たな話題に再び興奮状態を体験した。再現すると以下のような様子である(シンポジウムの様子は、写真参照)。

[当日のスケジュール]

- ・日時: 2012年3月30日(金) 午後13:30~17:00
- ・場所: 神奈川大学 SHC11 号館第2会議室
- ・テーマ: 国際物流の新動向と課題

[プログラム]

—講演—

- ・キーノートスピーカー: Yong-Keun Lee Ph. D.
(中央大学校)

- ・第一講演者: Shoko Okamoto (神奈川大学)
一層のグローバル化に対応する
日本企業と貿易の電子化

物流や情報流を基盤としたグローバル化時代では、国籍を超えた商取引が日常化している。それに拍車をかけているのが電子化である。この電子化は高度な技術を駆使できるかどうかによって、企業間のみならず国家間格差を広げる懸念もある。

- ・第二講演者: Seok-Beom Choi Ph.D.
(中央大学校)

韓国の電子船荷証券法律と運用システム
グローバル化時代にふさわしい制度の導入を意図して、韓国では2008年に電子船荷証券法が施行された。その法律の基本特性を明らかにすると共に、従来からの運用モデルとの比較検証が必要となる。またその検証過程で問題点、活性化の方途が明らかとされる。

- ・第三講演者: Jung-Hwa Lee (神奈川大学)
釜山港における東北アジアハブ港化
に関する研究

世界貿易のグローバル化および東北アジアの経済成長に伴って、釜山港が海上コンテナを中心に世界第5位の貨物取扱量を占めている。東アジアの実質的なハブ港化が進んでいる。しかし同時に関税自由化推進やITネットワーク推進などの課題も山積している。

- ・第四講演者: Yong-Keun Lee、Yong-Heun Kim
(中央大学校)

韓国のグリーン成長政策と物流

韓国の大統領の提案する‘低炭素グリーン成長’政策を韓国の新国家パラダイムとして位置づけ、物流政策とのかわりを考究する。その一方で成長政策とグリーン政策との兼ね合いが問題になる。CSRの枠組みにもとづく議論が求められる。

—シンポジウム—

5人のスピーカの報告を踏まえて、後半は会場からの質疑応答を中心としたクロストークに入った。議論では個別国家を意識した商取引の時代から次第に、国のボーダーを超えたボーダーレスあるいはMade in the Worldの世界に入りつつあることが共有された。そしてそのボーダーレスを促している有力なツールが電子媒体であることを改めて認識した。

余談であるがオフサイトの懇親会で韓国中央大学校の教授連に2つの国籍の話をして、大いなる賛同を得た。第一の国籍は地球人国籍という本籍、第二の国籍はそれぞれの国の現住所という話である。本籍はあくまでも地球人という視点である。自分が地球に対してどのような貢献ができるかが、まず問われる時代にあることを半日の議論をつうじて知った。有意義な時間をすごした。

参加者は地元経営者、市民、経営学部教授、他大学教授などを含め40名を超えた。他用と重なっていた後藤学部長も閉会の挨拶に間に合わせて参加してくれた。当日情報を共有できた研究仲間に改めて感謝の意を表したい(E)。

夢先生から学んだ3つの「C」

後藤篤志

今回、神奈川大学に着任して初めて研究余滴の執筆依頼を受けました。内容は自由にということでしたので、私が見学させていただいた日本サッカー協会のある取り組みから感じた事を綴りたいと思います。

日本サッカー協会では、協会のスローガン「DREAM～夢があるから強くなる～」を基にJFAこころのプロジェクトという活動が2007年の4月から実施されています。これは「夢の教室」と呼ばれ、子どもの心身の健全な成長に寄与することを目的とし、「夢先生」が夢を持つことの素晴らしさや、夢に向かって努力することの大切さを伝えるために小学校の先生となって授業を実施するものです。2010年度には国内だけでなく、ドイツやタイといった海外の日本人学校を含め877回も実施されています。夢先生にはサッカー日本代表選手や、なでしこジャパンの選手のみならず、バスケットボールやマラソンといったサッカー以外のアスリート、さらにはミュージシャンや芸能人など様々なジャンルから選ばれているのも特徴的です。

私が夢の教室を知ったのは、本学の学生がインターシップ先としてJFAこころのプロジェクト推進室でお世話になった事がきっかけでした。昨年8月には、本学の湘南ひらつかキャンパスで「親子で語ろう“夢の教室” in 神奈川大学」という特別企画も実施されていました。昨年末、推進室の方に「是非一度夢の教室を見学させていただきたい」とお願いしたところ、『今年1月中旬に相模原市の淵野辺小学校で実施される』とのこと。大変良い機会だと思い、学生にも声をかけて見学に行くことにしました。

私が見学した時の夢先生は、女子バレーボール元日本代表選手の落合真理さん。彼女は家族の影響で小学校3年生からバレーボールを始め、日本代表選手の講習会に参加した事をきっかけに日本代表選手になりたいという夢を持ちます。成徳学園（現在の下北沢成徳高等学校）に所属した高校時代には春高バレーで3位。高校生ながら全日本代表候補となり、あと一歩で夢が叶うところまで一気に駆け上がりま

す。しかしVリーグで所属した日立は企業の経営難により廃部。そして新天地として移籍した久光製薬では、加入直後に膝の半月板を損傷する大怪我を負うなどの逆境に立たされます。これらの苦難を克服しながら2004年にはキャプテンに就任し、2007年にはシーズン3冠を達成。そしてついに念願だった日本代表選手になる夢を叶えます。

彼女は、授業の冒頭で児童に3つの「C」という言葉を贈っていました。それはまず、夢に向かって**挑戦 (Challenge)** すること。その挑戦によって自分自身や周りの人々、環境を**変化 (Change)** させること。これらの結果、夢をつかむための**機会 (Chance)** が迎えられること。さらに、バレーボールを通じた多くの経験から『一度だけの挑戦や変化では、夢をつかむ機会はつかめない。何度も諦めずにチャレンジとチェンジを繰り返していくことで漸く夢をつかむチャンスを迎えることができる』と児童

に強く語りかけられていました。見学をしていた我々は、3つの「C」という言葉はもちろんですが、夢先生が児童ひとりひとりに対して視線を同じ高さにしなが

ら丁寧に対話をしている姿に感銘を受けました。また、当日はこのプロジェクトの支援企業である八千代銀行の方々も見学されていましたが、『我々の会社でも社員教育研修でお話をさせていただきたい』と冗談交じりにお話しされていたのがとても印象的でした。

この夢の教室で夢先生が児童に伝えようとしていたことは、今年度の入学式で学長が述べられた祝辞の内容にも重なり感じました。それは「自分自身の能力を見限らない」ということです。自分自身に限界を作らず、挑戦していくことで自分自身を変化させることとなります。その結果、自己を取り巻く環境だけでなく周囲の人々からの評価を変えていくことにも繋がるのではないのでしょうか。私も一人の人間として、本学の教員として自分自身に日々挑戦し、変化を求めながら学生と共に成長していけるよう努力していきたいと思

います。
(所員/ ごとう・あつし)

研究余滴

地域経営関連最新情報 ―ヒアリングを経て―

春休み期間を利用して、地域経営がらみで、全部で6事例の南方面へのヒアリングを挙行了。その結果、幾つかの“面白い現象”や新たな発見があった。ここに主観的な印象も交え「西南見聞録」をつぶやき風に紹介する。

1. 「地域経営」専門の別府大学教授

その教授は大分県の元知事の平松氏の秘書経験を経て研究者の道に進んだ。専門は地域経営学である。平松氏は“一村一品”運動で、日本中を賑わせたいわば地域経営の先進的リーダーの一人である。現在も現役で活躍中である。別府大教授は今年の4月から国際経営学部の学部長職の任にある。名を関谷忠という。観光客が一時期最盛期の十分の一にまで落ち込んだ別府をどうするかは、地域全体の死活問題でもあった。地理的には別府に近いところにありしかも集客コンセプトで一線をかくす湯布院が大人気で、別府に対してはマイナス要因として作用したことも否定できない。以下の2および3の事例は関谷教授からご紹介いただいた(面接日:3月5日)。

2. ハットウ・オンパク (別府八ハッ湯トウ温オン泉泊パク覧会)

NPO 法人のハットウ・オンパクが企画推進している地域資源を活かした実践行動やイベント中心の体験交流型プログラムである。現地でもいただいた2010年5月号の案内書によれば、「オンパクココロクルギフト＝ココロを送るギフト」「チームオンパクのココロ」「おくり隊＝贈オクリってあげ隊タイスペシャル」「地元のねたを楽しむ時間・・・じねたび＝地元のねたを楽しむ旅タビ」「おいしい時間・・・食&エコ」「ココロゆるやかな時間・・・まち」「ココロおだやかな時間・・・温泉&メンタル」「ココロみちていく時間・・・健康&美」の8カテゴリーがある。それぞれのカテゴリーが6から10を超えるメニューを準備している。おやつ!!と思わせる事業の名称語呂合わせも、共通の仲間意識を高めるのに役立っているようである。

その根底にある思想は、地元の人たちにとって魅力のある資源とは何かを探し、その魅力に単なる参加ではなく自ら参画することによって地元以外の外部の人たちにも参画してもらおうという試みである。現在ジャパン・オンパクの名で全国16の地域に広がっている。企画にはNPOの他にオンパクパートナーも参加する。事務局のスタッフで企画トレーナーの仕事もされている末田加良子氏から説明を受けた。ハットウ・オンパクには虫や鳥、動物たちを呼び込む色や匂い、花、実を工夫して用

意する、いわば被子植物の風情がある(面接日:3月6日)。

3. 「昭和の町」再生プロジェクト (豊後(ブンゴ)高田市)

豊後高田市もご多聞にもれず、生活様式の変化や郊外型モールの誕生、後継者難、消費者行動の変化などが相乗的にマイナスのスパイラルを生み出し、中心商店街は“ヒトよりも犬、猫のような動物のほうが多い”といわれるほどさび果てた。あるのは昭和時代の古臭い、いい意味ではノスタルジックな“たたずまい”のみであった。90年代には、大手コンサルタントに依頼して活性化構想を模索した。しかし資金面で実現しなかった。最後の切り札が、地元商店主、会議所、市役所など地元の関係者たちによる、再生プロジェクトであった。

4、5年かけて議論し、ようやくたどりついた結論が、昭和への回帰つまり「昭和の町」構想であった。建物おおよそ100軒を含む再生理念は、①建物を昭和時代に改修する＝建物再生、②店舗に残っている昭和の品物を展示する＝歴史再生、③店舗ごとに昭和の品を開発する＝商品再生、④心の通うもてなしをする＝商人再生、の4つである。博物館や郵便局、倉庫も概観はまさしく昭和時代にタイムスリップする。女性の店員のなかにはもんぺ姿の方もおられた。今ある地域資源を活かした商店街興し、そして町興しの例である(面接日:3月6日)。

4. 香川大学大学院の地域マネジメント研究科

かつてある団体のプロジェクトで一緒に仕事をしたことがある教員が現在研究科長の任にある。準備期間に2年を費やし発足してから8年、計10年たつという。今、旬の“地域マネジメント”が、である。SHCの共同研究「地域経営」2年目でいい気になっていても駄目だ、ということがよく分かった。本州との間に橋が架かり地域住民の買い物行動が地元離れを起こす、仕事機会が減少するなどの現象に見舞われ、文字通り学公産民一丸となつての対応に迫られたのがきっかけである。ファシリテータ役は大学。今回お世話になった教授の名前は板倉宏昭である(面接日:3月27日)。

5. 高松丸亀町商店街

天国と地獄、そして再生。1992年当時、商店街売上270億円、1店舗あたり売上1億8千万円。その後、一貫して減少、売上は現在最盛期の50%減。中央商店街通行量は、92年当時16万人/年だったのが08年には9万

人年に減少、しかも休日 7.6 万人は平日 9.2 万人/年より 1.6 万人/年少ない (高松丸亀町商店街振興組合資料、2008 年度)。A 街区から G 街区まで約 500m、A 街区から 2005 年再開発事業開始。土地の所有権と利用権とを分離し、生活者目線で事業展開。一種の私有資源の共用資源化推進。LOHAS を基調にスローフードから食を提案。2012 年 4 月に G 街区に 12 階と 13 階建てがオープン。商業施設、マンション、ホテルなどが入る。市民や滞在者の滞留化をねらう。両端にある A 街区と G 街区との間に BCDEF 街区をサンドイッチ状態ではさむ。

家業を継ぐ必要のない次男坊 (本人談) のポストを生かし、古川康造が高松丸亀町商店街振興組合理事長を務める。今回ヒアリングに応じてくれ、お世話になった。香川大学大学院地域マネジメント研究科と丸亀商店街振興組合とは、非常勤講師派遣、情報交換などで密な関係を保っている (面接日：3 月 27 日)。

6. 主婦が起業した尾道空き家再生プロジェクト

200 軒を超える空き家はその大半が私有資源しかも死蔵している再利用されることのない私有資源である。これを他のヒトが利用するいわば“他用”資源化することによって、資源活用度が向上する。つまり個人資源の社会資源化あるいは地域資源化が推進される。尾道ではかつての別荘が丘の中腹に無人の廃屋状態で数多く存在している。内装をリニューアルすることによって住宅のみならずアトリエやセミナーハウス、ギャラリー、工房、趣味のお店などへの変身が可能となる。

再生させることによって有効利用が図られ、景観が維持される。街の活性化にもつながる。高松丸亀町商店街振興組合の資源利用方法と類似している。平たくいえば、他人の資源を借りて共同利用する形態である。私有一他用あるいは私有一共用モデルともいえるかもしれない。代表理事の豊田雅子氏にはヒアリングと半日現地ツアーに同行していただいた。学部共同研究者の同僚 2 名、平塚の中堅企業経営者 1 名も参加した。

全国でも空き家は 2008 年で 757 万戸、最近 10 年間で 180 万戸増加している (朝日新聞、2012 年 4 月 8 日)。景観を損ねるだけではなく、放火や空き屋不当占拠のような反社会性も誘導する。当然の帰結として有効活用が待たれる (訪問日：3 月 9 日)。

レポートまとめ：6 箇所の現地視察、識者からのヒアリングをとおして、地域経営にかんする共通のイメージが若干ふくらんできた。ここに披露することにより、報

告に代えたい。

- ① 経営体としての地域の危機に直面：地獄の釜をのぞくほどの経験をして始めて気がつく人間習性。
- ② 危機を救う 2 つの途：1 つはジャンヌダルクの登場。もう 1 つは集団による集合智結集。2 つはコインの表裏の関係にあり、長所短所が逆になる。共通しているのは、両者とも発展途上時には地域力 (ちから) として作用していることである。
- ③ 他力資金の愚直なまでの応用：資金調達面では国、県、市はいうに及ばず、自らの資金も使い、共に“社会なべ”に入れる。
- ④ 参画者の異常性：周囲の常識を打破する勇気が必要。そのためには自分自身のなかに“限界集落化”に代表される地域遺伝子を無視し、新たな遺伝子を注入する異常性が求められる。それが次世代の正常性を生み出す。ニュースになるには、そのような新奇性の表出が望ましい。
- ⑤ 死蔵されている私有資源の共用化：価値を生まない資源を付加価値化するのには、ヒトとしての社会的使命である。資源の有効利用のためには余計なお世話をする勇気が必要となる。部分と全体との統合化が推進される。
- ⑥ 地域資源の“地育”資源化：地元ではたとえ見向くヒトがいなくても、トキトコロを変えてみると、それが“おやっ”と驚く資源に生まれ変わる。小樽の倉庫群や山陰の黒壁もかつて死蔵していた単なる存在物だったのが、見方を変えて地域の親孝行息子や娘に生まれ変わった。
- ⑦ 誘致は諸刃の剣：誘致に成功した直後から自助努力なしで地域の収入が増大し、誘致企業への依存度が増す。次第に地域頭脳の機能傷害が生ずる。
- ⑧ イベントの恒常化不可能：日本一の“お祭り”がわが地域にあれば、1 年を通じて活性化されるのであろうか。イベントはあくまでもイベントであって、一過性にしか過ぎない。準備とあと片付けを含めても 1 週間から 10 日程度であろう。日常のなかの非日常性、そして非日常のなかの日常性が求められよう。単一イベントではなくイベントの複合化、多重化、そして日常化が真の活性化につながる。 (文責：海老澤 栄一)

市民対象コンシェルジュ構想第二弾調査結果速報

2011年に実施した2年目の調査は、対象地区を大きく3つに分けた。その1つは昨年度に引き続き平塚市、第二は平塚市以外の近在の地域である、藤沢市、茅ヶ崎市、秦野市、中郡(大磯町、二宮町)を対象に平塚市と同一内容の調査用紙を使用した。さらに第三は横浜市在住の市民の協力を得て、“湘南イメージ”にかかわる調査を実施した。いずれも郵送による標準質問様式の方法を採った。

分析の対象となった有効サンプル数は、平塚市29、藤沢市、茅ヶ崎市、秦野市、中郡(大磯町、二宮町)は88、横浜市79であった。以下ここでは第二、第三の調査結果を報告する。

[2年目の調査結果：藤沢市、茅ヶ崎市、秦野市、大磯町、二宮町、および平塚市との比較]

前回の『国経研だより』(2012年2月1日号)では、2011年および2012年の2年間におよぶ平塚市民のみを対象にした“日常生活で困っている問題”の意識調査結果を報告した。今回は前回と同一内容の問題に対する平塚近在の住民、具体的には藤沢、茅ヶ崎、秦野、大磯、二宮在住の人たちの意識調査結果を平塚市と比較分析を交えて報告する。平塚市民との共通の問題にはアンダーラインを付してある。年齢別の分布は、有効回答数88のうち、60歳未満は15(17%)、60歳以上が73(83%)となっている。また性別でみると、女性10(11%)、男性78(89%)である。大きなくくりでは、60歳以上の男性の母集団が圧倒的多数を占めている。

1. 身近な暮らしの問題

- ・不便さの指摘：ATMの設置場所、公共の乗り物(含むコミュニティバス)、大型店舗までのアクセス距離、個人商店の消滅、公的機関の土日祭日休業、周辺商店の閉店時間の切上げ
- ・隣家とのトラブル：換気扇から排出されるタバコの煙、ペットの声、ゴミ出し
- ・ムダの指摘：過剰包装
- ・生活のイライラ：騒音、猫の鳴き声、駐輪場での“寄りかかり方式”自転車出し入れ、無気力商店の存在、不法ゴミ投棄
- ・マナーの悪さ：歩行者、自転車、乗用車、観光客、生活道路への営業車の乗り入れ、駅ロータリー周辺の送迎車の無駄な間隔→渋滞惹起
- ・道路の問題：歩行者と自転車との不十分な棲み分け、ポイ捨て、狭隘性
- ・ひとり住まいの弊害：空き家の処理、樹木の枝おろし、コミュニケーションの欠落、電話による勧誘

2. 地域社会問題

- ・地域間連結の欠落：公共施設の有効利用や路線バスの広域利用方法の未確立
- ・公的施設の欠落とその広域利用必要性：ヨットハーバー、公民館活性化、全体マップ作り→大学がその任を担えないか
- ・公共性、インフラ系の欠落：公的機関のサービス低下、駐車場不足、駐車料金の高騰化、駅前の安寧欠落、景観を無視した建物建築、道路舗装の老朽化からくる住居の振動、異常な交通渋滞、高速道路使用料の高値定着

3. 職場と地域との乖離問題

- ・地域遺産や遊休施設の軽視：歴史的建造物や未使用施設の放置
- ・労働者の労働公平性の欠如：公共施設の活用や交通手段利用の軽視
- ・シニア労働力を含む人材活用の死蔵化：活路の場や横断的活用の社会的機会喪失
- ・行政と市民生活の互助機会の欠如：大学の文化発信基地としての役割希薄
- ・地域経営への若者の未参画：学生による商店街経営戦略構築への消極的参画

4. その他

- ・非道徳的ビジネスを排除する運動展開
- ・公共性のある精神を市民に植えつける
- ・“おらが町”の日本一を創る
- ・サテライトオフィスやSOHO(Small Office Home Office)の推進
- ・砂によるサイクルロードの埋没化：官・公・民ともに、見て見ない振り

また、地域問題の指摘を超えて、積極的な提案もいただいた。ここに披露しお礼に代えたい。

- ・文化交流を基盤にした人的魅力を訴えるテーマパークをつくり、若いヒトをエンカレッジする。
- ・街路樹を完備し、“木漏れ日”のある街をつくる。一国沿いにある大磯中学校前のように。
- ・朝市に合わせてワンコインクルーズを用意する。
- ・気軽に相談できる法律相談所を設ける。
- ・専門分野ごとに専門家ネットワークをつくり、相談できる仕組みを準備する。
- ・市民税のインターネット振込みをできるようにする。

平塚市とそれ以外の地域との関係では、共通部分と独自性をもつ部分とがうまく分布しているように思われる。特に道路の拡張や共通の広場の確保、買い物の不便性、ゴミ、騒音、オラが村の日本一、などは共通している。その共通基盤の上にそれぞれの街の個性を、個性としてしっかりもっている必要がある。特に第三のアイディアを生み出すために、欠かすことのできない部分が独自性になる。自分磨きをしながら連携や提携、結合などを推し進めることが肝要であろう。

これらの非常にスマートな各種の提案を眺めていると、ひとつの方向性がみえてくる。それは、社会性をもった地域住民同士がお互いの得意技を出し合い、結果として第三のアイディアを創り出し、できるところから結び合い、小さな試みを繰り返し、その結び目を次第に大きくしていくことである。腕を組んで批判しても何も解決したことにはならない。行動を伴う判断、生命価値を高める生活が今こそ求められているのではないだろうか。一度現実を外に転がして外から眺めることも意味があろう。いわゆる外転法の導入あるいは第三の案の創出である。大きな括りが必要であれば、社会的コンシェルジュ構想がそれにふさわしいのかもしれない。

回答者からの重要な指摘：①アンケート用紙の設問の1つに「観光地として湘南地区をみた場合、…」の記述があった。これに対して十数名の回答者から、「湘南地区の範囲は?」「湘南をなぜ観光地としてみるのか?」「湘南の言葉が先行して、まとまりがない。回答不能である。」「鎌倉を除き観光地とはいえない」などの厳しいコメントが寄せられた。いずれも当を得ており、安易な設問を用意したことを深く反省している。設計段階では、認識の違いがかなりある用語なので、回答者の反応をみながら意見の集約を図る意図があったことも事実である。また「平塚に陸運局ができて、湘南ナンバーのエリアが拡大したため、湘南は茅ヶ崎まで、平塚以西は西湘という昔からの常識が無視された」との意見もいただいた。②平塚商店街に対する他市在住の方からのコメントに「昔の活気が感じられない。厚木、藤沢の隆盛についていけないのは、店主の古い体質と排他的保守性が災いしているのではないか」があった。一度店主の方々とも話し合いの場を作ってみたい。

【横浜市民からみた湘南イメージ】

横浜市民 79 人から貴重なご意見をいただいた。年齢分布では 60 歳未満が 18 名 (23%)、60 歳以上が 61 名 (77%) となっている。また男女比率は女性 7 名 (9%)、男性 72 名 (91%) である。母集団でいえば、圧倒的多数は 60 歳以上の男性である。

<イメージ>

- ・湘南をイメージする都市：江ノ島、鎌倉、逗子、葉山、湯河原、小田原、茅ヶ崎
(編集者注：平塚、藤沢にある2つの大学とも“湘南”をキャンパス名に付している。しかしその思いとは裏腹に横浜熟年層市民の抱く湘南のイメージには届いていないようである。以下の報告も横浜熟年層から湘南として認知されていない湘南平塚からの発信となる。)
- ・自然環境：海、緑、空
- ・文化：歴史、ロマン、明るさ、夢、自由、若者、開放感、解放感、首都圏のオアシス、文化人、中流のやや上クラスの人たちの生活圏、寺、サーファー
- ・パラドックス：良〜クリーンな海岸線、自然を生かした公園、独特のオシャレ感、保養地
劣〜汚い海、交通渋滞、劣悪なる駐車場、シーズン中の混雑、高い物価、過度の観光地化、おかしなヒト、無粋な電柱、観光客相手の“ぼったくり”
- ・パラドックスの超越：自然と重厚な歴史とが調和する近代的な明るさ
若者から年寄りまで受容れるオンシーズンとオフシーズンとの共存
観光客と地元人が共にリラックスできる地域の確立
懐かしさを残し古いものを大事にしながら新しいものとの調和を図る→
東京からの出店は単なる誘致で、固有の地域イメージ破壊
歴史の中に息づく若者の街=昔の若者と今の若者との融合
地元ビトの生活の豊かさと流れビトの心の豊かさとの棲み分け

<提案>

湘南をボコボコに叩きながらもやさしい目で手を差し伸べる提案者もいる。

- ・海岸沿いにある都市（あえて都市名は伏せる）間や自治体間で津波対策を含めた協同作戦を展開する。
- ・自然の美しさを自然な形で維持し、安心できる落ち着いた雰囲気のある行楽地を形成する。統一のとれた景観形成が可能となる。

これらの貴重な意見や提案を俯瞰すると、湘南のような多様なイメージは特定の方向に、具体的には行政やビジネス、生活などの自分勝手な都合のよい方向に強引にもっていくのではなく、それぞれの心のなかで静かに生きている形が一番の落ち着きを見せるのではないだろうか。たまたま材木座にお住まいの方からのメッセージによれば、漱石が湘南のことを“落ち着ける場所”としたためている文があることを教えていただいた。多謝。

I 2012 年度事業計画

1. シンポジウムの開催
2. 公開講演会の開催
3. 各種出版物の刊行
4. コンシェルジュ構想(小中高生作文募集)

期にかけての言語および文化の変遷

- ③ 利害関係者による社会的企業化の満足度測定に関する研究

研究所附置センター

- ① STS センター
- ② 中小企業センター

II 2012 年度 常任委員の役割分担 ◎リーダー

研究所所長(全体総括)	海老澤 栄一
企画(シンポジウム)	◎青木 宗明 菅野 正泰
編集 『国際経営フォーラム』	◎菅野 正泰 道用 大介
『マネジメント・ジャーナル』	◎道用 大介 海老澤 栄一
「国経研だより」	◎広嶋 進
データベースの構築	◎穂積 和子 青木 宗明
小中高生の作文募集	◎広嶋 進 穂積 和子

IV 国際経営研究所からのお知らせ

国際経営研究所では新たに下記の用品・洋書等をそろえました。研究等に役立てていただくために貸し出しをしておりますのでご利用ください。
なお、従来の用品等もご活用ください。

1	用品	プロジェクタ
2	用品	レッツノート CF-S10CYBDR
3	消耗品	i pad 2wi-Fi
4	消耗品	レーザーポインタ
5	消耗品	サンヨーデジタルムービーカメラ
6	消耗品	ポータブル DVD プレーヤ
7	消耗品	針なしステープラ
8	消耗品	Dell inspiron15 premium
9	洋書	C. G. Asmussen, et al.(eds.) Dynamics of Globalization, Emerald, 2011
10	洋書	D. Southerton(ed.) Encyclopedia of Consumer Culture vol.1~3, SAGE, 2011

★その他、閲覧用に貴重な洋書を多くそろえてあります

III 2012 年度 研究プロジェクト紹介

1. 新規

- ① テーマ: グローバル化社会に対応するレベル別大学英語教育ストラテジー研究
メンバー: 岡崎 万紀子 関 真彦
- ② テーマ: 近代社会の成立ー社会の組織化をめぐる諸考察
メンバー: 後藤 伸 萩原 富夫 吉田 隆
- ③ テーマ: 国境を越えた環境経営ー低酸素社会構築のための条件整備ー
メンバー: 李 貞和 海老澤 栄一

2. 継続

- ① 持続的発展可能な地域形成に関する総合研究
- ② 企業リスクマネジメント

3. 完成年度

- ① サービスオリエンテッドなデザイン手法の研究
- ② イギリス中世からルネサンスおよび宗教改革

編集後記 ~~~~~

33号をお届けします。
昨今は周知のように各地のシャッター通り商店街が問題化しています。本号4面、5面「地域経営関連最新情報」は、豊後高田市、高松市丸亀町商店街、尾道市空き家再生プロジェクトなどの取り組みのヒヤリング報告です。湘南諸都市のアンケート「市民対象コンシェルジュ構想」の「調査結果速報」とあわせて、ぜひ御一読をお願いいたします。(H)

~~~~~